

C-3. 幼児も保護者も教師も育つ、保護者参加の工夫 大幸幼稚園(愛知県名古屋市)

保護者もともに育ち合う

本園には、保育参観・参加、園外保育、弁当参観、誕生会・焼きいも会など様々な行事に保護者が参加する機会がある。しかし、幼児が自然に生活する姿をみる機会は少ないのではないかと話し合い、幼児も保護者も教師もともに楽しむことができる方法を、教師間で話し合い次のようにした。

ア 改善の内容

<方法>

- ◇ 保護者が都合の良い日を選択して何度でも参加できるようにする。
- ◇ 事前に一覧表に希望日を記入して、5~6人で参加できるようにする。

<教育相談>

- ◇ 前日に保育のねらいと保護者に心がけてほしいことなど、幼児へのかかわり方を伝える。
- ◇ 当日の降園時に、今日の保育で「幼児が心を動かした」姿を話し合い、保護者が気付いたことを聞いたり、幼児の学んでいる姿を伝えたりする。

<保護者の参加回数を増やす>

- ◇ 昨年まで各学期1回だった保育参観と、弁当参観や園外保育、会食参観、行事参加も加えて、5歳児は6回、4歳児は11回、3歳児は7回にした。

「親子で飛び出そう自然の中に一小幡緑地公園遠足」

小幡緑地公園でホタルを育てている人たちがいることを知り、「ホタルを育てる会」の方と連絡をとる。遠足でホタルの説明をしていただくことになる。

事例 教師が遠足の下見に行くことを伝えることも環境づくり 「保護者も誘ってホタルとの出会い」

5月31日(月)小幡緑地遠足へ行きたい気持ちを高めようと、幼児に、夜になると川の周りを飛び交うことを伝えてホタルへの興味を膨らませた。夜に担任が下見に行くことを伝えたところ、保護者から「私も行きたいので場所を教えてください」と申し出がある。そこで、「ホタルを見に行きます」と、夜の下見に行く日時と場所と地図を幼稚園の掲示板に貼った。

当日17:30ころ、参加した保護者は担任に会えるとほっとした表情で担任のところに集まってきた。幼児が眠くなるはずの19時から20時ごろに出かけることには抵抗があった。しかし、夜のお出かけは、幼児にとっても新鮮な経験だったようだ。翌日は元気に、「いっぱいいた」「ピカピカだった」と、楽しかったことを友達に話していた。



下見に参加した親子

自分たちだけでは、不安でしたが、先生たちが一緒なので、来る気になりました

考察

TVや新聞などでは、ホタルが話題になることが多い季節である。保護者の中には興味はあるがどうしたらよいかと戸惑い、実行までいかないことがある。そんな保護者の気持ちに響いたようだ。翌日登園した幼児たちの表情から、「本当に楽しかった」と分かった。「教師が遠足の下見に出かけることを具体的に伝える」ことも、自然環境により親しむことができる環境づくりとなった。

事例 公園でひと遊び『サクランボの実おいしい!』・『ホタルのおじさんとの出会い』

6月3日(木)5歳児60名、教師3名、保護者10名が参加。高い軌道を走るユトリートバスは見晴らしがいい。15分ほどで「小幡緑地公園駅」に到着。さらに15分ほど桜並木の道を歩くと、歩道にサクランボの実がたくさん落ちていいる。サクランボを食べたことがあるとか、この実は食べることができるだろうかとか、道添いの草に食べることができる草があるとか、などを話題に遊具がある公園に到着。(事前にサクランボの実を採ってよいことを確認済み)

エピソード	教師の読み取り
<p>教師が「これ、桜の木になっている実だからサクランボだよ」と、食べて見せると、こわごわ自分たちも食べてみる。苦味や酸味が強い中にやや甘みがある実だが、「あまい！」と感嘆する友達の表情につられて、おそるおそる食べてみる子もいる。</p> <p style="text-align: center;">あまい！</p> <p><保護者の様子> 付き添っている保護者が、幼児がサクランボの実を集めたり、木になっている実を食べたりする様子に驚いて、「ほんとに食べられるのですか」「実の色が違いますね」「幼児って、いろんなことに気付くのですね」「何度もきている公園ですけどこの実は初めてです」などと言う。教師がサクランボの実を「食べてみませんか」と差し出すと、「おいしいんですか」と不安そうに食べようとしない。「おいしいと思わないで、どうぞ」と声をかけると、口の中に入れて「これが、甘いと思えるのね」と、笑う。</p>	<p>教師の話をも素直に受け入れ、食べてみようという勇気をもって挑戦している。家庭で食べるサクランボのように、この実もおいしいだろうと見通しをもったようだ。</p> <p>保護者も今までの経験や知識をもとに考え、自分が知らないことに驚いたり幼児の気づきに感嘆したりなどしている。保護者が幼児と同じように楽しもうとする気持ちを持ち始めている。</p>
<p>ホタルのおじさんから、「ホタルの一生」の話しを聞く。実際にホタルを見て、触らせてもらう。ホタルを初めて見る親子も多く、感嘆の声がもれる。虫が苦手な子も、思わずホタルを手にとり、「なんかあったかーい」「ほんとにぴか、ぴかして光ってる」と、喜ぶ。</p> <p style="text-align: center;">ホタル、大きいね。光っているよ</p> <p>保護者も、かごのホタルを覗き込む。</p>	<p>源氏ホタルは予想より大きいようだった。自分なりに、ホタルの大きさを考えていたようだ。ホタルがわずかに光ると目ざとく見つける。そこに温かさも感じている。保護者は幼児の言葉を確認するように見ている。</p>
<p>ホタルの川から昼食場所へ移動中に、源氏ホタルを見つかる。ゆっくり動くホタルをプローチのように飾ったり持ち歩いたり楽しむ。次第にホタルが弱り始めると教師や他の子と相談し、川へ放そうとする。保護者もゆれる幼児の気持ちにどうしようかと袋を渡したり「どうする」と聞いたりする。</p>	<p>おじさんから聞いた、ホタルが川で育つことを思い出している。ホタルのことを考えると放さなければならないが、もち帰りたい気持ちを変えることが難しいようだ。それを乗り越えようとしている。</p>
<p>浮石を発見！ 友達が手を差し伸べ、ひっぱってくれる。道は続いているので、そこを通らなくても目的地にはいける。しかし、浮石の怖さを体験。</p> <p>保護者も渡ってみる。「キャー」と声を上げる保護者の手を幼児が引く。</p>	<p>この子と仲良くなりたいと思うから、手をつなぎたくなる。友達が手を引いてくれるから好きになる。怖いところも友達がいるとやってみたくなるようだ。保護者が楽しむことを幼児も快く感じている。</p>

考 察

- ❑ 保護者もサクランボの実を食べて幼児の感じ方に気付くことで、幼児と一緒に楽しもうとする気持ちが高まっていった。家庭で一緒にどこかへ出かける経験はするが、他の幼児たちの様子を見ることで、保護者自身も家庭で思いつかない経験が様々でき、より自然に親しんでいたと思う。
- ❑ ホタルを捕まえた幼児は、ホタルの寿命や生きる場所を友達が教えてくれた。その意味を理解し、受け止め、ホタルを持ち帰りたい気持ちを何とか乗り越えて、川に放した。保護者も、なかなか気持ちを切り換えることができなかった幼児が、友達の支えで、時間をかけて、納得して考えを受け入れる。友達との関係が様々な心の動きを引き出している様子を目の当たりにすることができた。
- ❑ 幼児が楽しむ姿と一緒に体験した保護者は、思わず知らず幼児と一緒に動き、幼児の楽しみをもとに体験していた。

遠足その後

以前の遠足下見のことが伝わり、保護者からの依頼もあり、掲示板で幼児や保護者に声をかけて、夜の公園にでかけることになった。昨年までは『あの公園でホタルが見られます』というチラシを配っても、あまり反応がなかったが、今年は口コミが伝わり、毎晩でかける家庭もあった。

ポイント

自然に触れる機会が少ないのは、子どもだけでなく親世代にも広がっています。子どもと同一体験をしていくなかで、保護者の気づきの深まりや、自然を楽しむ気持ちが、子どもの気持ちに安定をもたらしていることがわかります。子どもの情緒の安定は、自然に対してさらなる「心を動かす」ことにつながっていくでしょう。